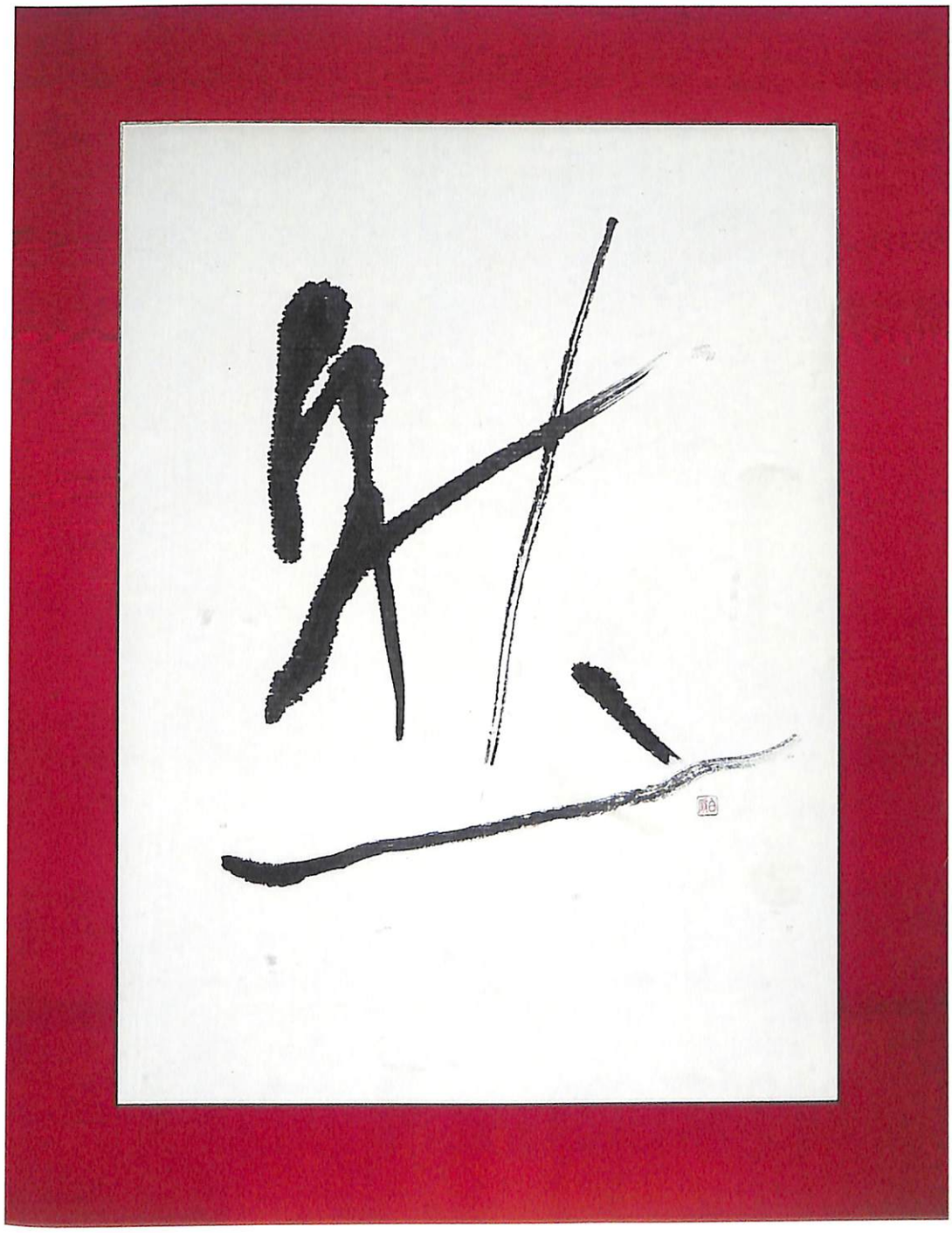
樋

VOL.47 2022

香川県立観音寺第一高等学校
同窓会 東京支部 http://www.kan1.jp/

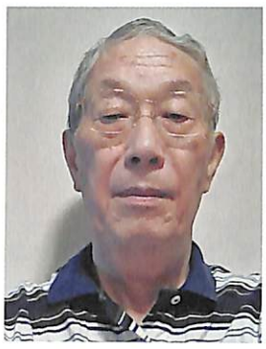
HIUCHI



特集

文芸・芸術の分野で活躍する同窓会員

巻　頭　言



激動の時代をどう生きるか

観一・15回　高橋俊之

ロシアのウクライナ侵攻は世界の安全保障や経済秩序を根底から揺るがし、台湾問題も含めて民主主義国家と強権国家の深刻な対立を浮き彫りにした。それに拍車をかける世界的な異常気象の多発、急激な物価上昇、いつまた流行するか分からないコロナの感染爆発・・・等悪い面ばかりが際立っている。

確かにこの一年はこれまで経験したことがなくてどう対処すべきかすぐには明確な答えが出ない難しい問題が山積している激動の年となろうとしている。

しかし冷静によく吟味していくと、そうした方向にいくのはそれなりの理由があってのことで、本来は人類の英知で時間をかけて真剣に話しあっておけば解決出来た問題ばかりと思われるがいかがであろう。

これらの問題を解決していくには、何故こうした事態となったかをいろいろな角度から検討すべきで、TV・新聞等で識者の意見を聞いていると、どうも自分の専門分野からの視点に重点を置きすぎて、分析は出来ても大所高所からの視点は他人任せのように思えてならない。本来それを果たすべきはずの国連は、機能不全のままで、改革を怠った付けが今重くのしかかっている。

米国一強の時代が終わった今は、世界秩序は米欧日などの西側陣営、中ロ陣営、中立パワーの３極体制に移った。西側陣営はそんな中立パワーを引き寄せ、秩序維持への支持を得るため、各国の損得勘定を読み解き、互恵の協力を探ることが第一歩になる。

今年は日中国交正常化50周年だが、それを成し遂げた我々の大先輩の大平さんなら今の事態をどう考えどう対処されるかを是非聞いてみたいと思うのは私だけではなかろう。大平さんは首相のとき、石油ショックに直面し国民生活を守るために大変苦慮され、苦悶されていたという。その当時の国民は、グローバル化の波に飲み込まれる前で、格差も比較的少なく一億総中流意識で、大平さんは「歴史上今が一番良いときで、今の国民の生活をどうやって守るか」に重きをおかれていた。

その中国は今や何かにつけてロシア以上の存在で、問題を投げかけている。先進関連特許出題件数では質量ともに米国を抜き世界一で、二酸化炭素の排出量も世界一で、中国抜きでは何事も決められない。

日本を取り巻く安全保障環境の変化を考えれば、防衛予算の増額は必要だろうが、財源をどうするか、国債で対応は結果的に弱体化に繋がるから、食料やエネルギーの安定供給も含めて大きな視野での議論が必要であろう。戦争は如何なる理由があっても絶対やるべきではなく、そのための抑止力は国力を高めて外交的にも尊敬される国になれるよう、国民一人一人が自分の置かれた立場で何が出来るかを考えることが大切である。

慎むべきはナショナリズムに走らず、どの国どの民族であっても相互理解のもと、時勢に流されず、聞く耳持たずではなく、相手の意見に耳を貸しつつも自分の感性を信じて行動することが重要である。

身近な問題としても身の危険は今や至る所に存在し、知らず知らずのうちに被害者にも加害者にもなり得ることは、コロナの医療逼迫や、旧統一教会のマインドコントロール、オレオレ詐欺、SNSの真偽のほど等でも試されていることを肝に銘じるべきである。

VOL. 47 2022
香川県立観音寺第一高等学校
同窓会東京支部　http://kan1.jp
HIUCHI

文芸・芸術分野で

巻頭言　激動の時代をどう生きるか　髙橋俊之 …… 1

特集　文芸・芸術分野で活躍する同窓会員

加藤忠道氏（観一11回）作品集 …… 4～7

44歳、役者5年生。　廣田琴美 …… 8～12

連載　先輩こんにちは（第23回）

たなか游 氏（俳人・書家、観一16回）　「書と俳句に魅せられて」
　インタビュー／構成：長谷川澄治 …… 13～19

短歌・俳句

短歌　ＡＩの涙　宇野哲子 …… 20

短歌　リ・スタート　山本益子 …… 20

俳句　たなか　游 …… 21

俳句　長谷川如空 …… 21

俳句　ジャックとベティ　朝倉さき子 …… 22

誌上再現／令和3年度「オンライン文化祭」

オンライン文化祭の企画・実行について　青山秀彦 …… 23

官報の徹底活用法　牧 潤二 …… 24

若手同窓生の同窓会参加の心得　組橋勇一朗 …… 25

コーヒーブレーク／スライドショー　写真で見る東京支部と『燧』の歴史 …… 26

遠隔地介護について　加賀宇 等 …… 27

mRNAって何？ ～ワクチンの基礎科学～　高島 賢 …… 28

ご挨拶　観音寺一高同窓会 会長　大久保 健二 …… 29

観音寺一高の現況報告　校長　小山圭二 …… 30

活躍する同窓会員

エッセイ／リポート

余生、家内・DFに感謝　合田隆年 …… 33～34
瀬戸の海、ひねもすのたりのたりかな　齋藤文一 …… 35～38
一遍聖絵と一遍語録　今井重信 …… 39～44
絵本『柞田飛行場』を拝読して　松尾政司 …… 45～47
なぜ中国人画家が日本人の満州引揚を描いたか？　―王希奇「一九四六」東京展に寄せて―
前山加奈子 …… 48～49
荻窪・花百景　百年目の百合　朝倉さき子 …… 50～51
喜平司（観一12回）著『嗚呼、人とは…―せめて志は高く堅く―』　松尾政司 …… 52～54
ツールド・シルクロード　20年計画を終えて IX　合田大次郎 …… 55～57
住めば都（第1回）海のかなたの物語　レバノン、ギリシャ　石井 勤 …… 58～63
『アウシュヴィッツへの道―ホロコーストはなぜ、いつから、どこで、どのように』を読んで
高橋俊之 …… 64～65
故郷は、ありがたきかな。　狩野裕子 …… 66～68
40歳の首だけの経営者　毛利公一が世界を救うものづくりに挑戦　毛利公一 …… 69～71

同窓会だより

令和4年度　東京支部からのご報告　久保和美 …… 72～73

追悼

級友の高井哲夫君を悼む　川上秀夫 …… 74
燧合唱団の功労者、故・岸陽子様を悼む　柳川邦衛 …… 75～76
終生の友　大西信幸君を偲ぶ　今井重信 …… 77～79
矢野宏和君へ　三宅孝雄 …… 80
矢野宏和君、亀山俊幸君を悼む　三宅孝雄 …… 81～82
物故者 …… 83

会則 …… 84
校歌 …… 85

広告のページ …… 86～91
編集後記　奥付 …… 92

『アウシュヴィッツへの道――ホロコーストはなぜ、いつから、どこで、どのように』を読んで

観一・15回　髙橋俊之

同期の横浜市立大学名誉教授で、現在も大学院都市社会研究科客員教授の永岑三千輝氏から今春刊行された題字の書籍と関連資料を贈呈されて読んだところ、時期に沿った非常に興味ある内容だったので皆さんに是非ご紹介しておきたいと思って投稿しました。

彼は現代ドイツ史を専門とする歴史学者で長年長短幾度となくドイツ滞在を重ねて多岐にわたる文献資料を調査して、ずっとドイツ第三帝国等の歴史を研究しています。これまでも関連論文を多数発表し、その時点までをまとめた著書を数冊刊行していますが、今回はその後これまでに新たに判明した事象や文献を調査整理して、より一層市民的レベルまでをも対象としての刊行となりましたので、我々素人にとってもああそういう経過があったのかと非常に考えさせられる内容が多く、参考になりました。

――以下私に送られてきた彼の説明文を抜粋――

現代社会とりわけロシアのウクライナ侵略という想像を絶することが起きており第二次世界大戦後の世界の在り方が問い直され、第二次世界大戦がいかなるものであったのか、世界秩序・国際連合体制がいかなる問題をはらんできたのかが、改めて根底から問い直される世界史的転換期に直面しています。

そこでは「ジェノサイド」、「ナチス」、「ネオナチ」といった言葉も、正確な意味合いが吟味されることなく飛び交っています。強盗団が武器を持って押し入り、家人を傷つけ殺害しながら、逆に被害者に対して『お前たちが強盗だ』と強弁しているのが、プーチン政権の侵攻正当化の言説ではないでしょうか。

「ウクライナのナチスをやっつけにきたのだ」と。

実際の犠牲者は非常にたくさんのウクライナ国民です。ウクライナ側に何の問題もないというのではなく、ウクライナの民族構成の問題や、ウクライナの民族主義的諸問題もあったとは思います。しかし、チェチェン、ジョージアの武力鎮圧をはじめ、今回のウクライナ戦争にいたるまで、第二次世界大戦を踏まえて確立した世界平和の原則を常任理事国ロシアが踏みにじったことは明らかです。国際紛争を武力では解決しない、戦争の手段にはが訴えないというのが二つの世界大戦を経験した世界の再出発の理念であったはずです。(実際には第二次世界大戦後も「安全保障理事会常任理事国」の強国・大国がベトナム戦争からイラク戦争にいたるまで、しばしばこれを破ってきたのですが)

拙著は、まさにそうした諸問題を考える上での、ひとつの比較検討素材となればと願っています。ナチスによるホロコースト――ジェノサイドの一形態――を正確に20世紀前半の歴史総体の中で把握しておかなければ、今日のロシアによるウクライナ侵略問題を考える際に、重要なことが見落とされるのではないか、と。

世界史の重大病理の一つを解いてみた、その一つの試みというもので、政治経済軍事事象を見る上での、ひとつの可能性として、謹呈いたします。

・・・以上抜粋

以下は紙面の関係で、私が興味深く思った内容を参考資料も含めた形で列挙しますと、

1．まず最初に感じたことは、歴史を正しく認識することの難しさである。膨大な文献・資料を基

に歴史を紐解く上で、いわゆる一般的に伝わっている事象についても、複合的ないろいろな要素が絡み合っていて、正しく理解するにはいろいろな切り口から判断された諸説を史実と忠実に照らし合わせて、どの部分は正しくて、どの部分は間違っているかを適切に捉えるために歴史学者は心血を注いでいる点である。そのためにはおびただしい資料を時間かけて調べるので当然定説と言われるまでにたどり着くのには長い年月がかかっている。そのため例えばホロコースト研究史の今日的到達点は、2021年になってやっと完結している。

2．独ソ戦・第二次世界大戦下のユダヤ人迫害は想像を絶するものだが、ヒトラーは最初からヨーロッパ・ユダヤ人絶滅政策を目論んだのではなく、独ソ戦だけでなく、世界戦争への突入こそ、政策転換の決定的要因であった。従って日常迫害を受けていたユダヤ人は早々に移住を決断し、米国やイスラエルに逃げたのに対して、周囲に協力者がいた人々は残留を決意し、結果的には多くの人が収容所に送られて殺戮された。

3．アウシュヴィッツでのユダヤ人虐殺は100万人ほどで全死者600万人の２割にも満たないのだがアウシュヴィッツのみが戦後大きく取り上げられた大きな要因はドイツ第三帝国総督府領内のユダヤ人三つの絶滅収容所は1943年の間に閉鎖され、ポーランドにおけるソ連の戦争犯罪「カチンの森」を喧伝するその背後で第三帝国は自らのユダヤ人殺戮については徹底的な組織的証拠隠滅を図ったので証拠が残っていなかったからである。一方それに対してアウシュヴィッツは当初の目的は収容所複合施設で総督府領内のユダヤ人３絶滅収容所が閉鎖された後は戦争末期まで殺戮施設として使われたので、証拠隠滅が不十分で戦後次々に殺戮施設としての証拠が明るみに出たからである。

4．従ってホロコーストにおいてアウシュヴィッツばかりが特筆されるが、アウシュヴィッツ以前こそホロコースト理解においては決定的に重要である。三つの絶滅収容所が証拠隠滅で完全に地上から抹消されてしまった。この証拠隠滅――それを可能にした戦況・前線の状況――こそが、三つの絶滅収容所が忘却されてきた理由であり、それまでに総督府ユダヤ人の殺戮はほぼ終了していたことも、その前提にあった事情であろう。

5．忘れていけないのは、ホロコーストで殺戮されたのはユダヤ人だけではなく、多岐にわたる何万・何十万の人が犠牲になっている点である。

6．著者が書評している管野賢治著「命のヴィザ」言説の虚構――いわゆる「命のヴィザ」を発給したことで知られる杉原千畝の発給時期・発給数などに関する巷間流布する言説には幾多の誤りがある。当事者の回想や新聞記事のみに依拠した言説には、事実誤認や「憶測」「主観的願望」、後知恵・事後的知識による歪曲などが入り混じっている。そうした誤りを「命のヴィザ」に関する一次資料を発掘し、それに基づいて諸事実の前後関係を精密に洗い直し批判的に解明している――

著者は一次資料絶対主義に傾きがちな箇所には問題を感じるが、一次資料の語る豊富な立体的事実群によって実証的に解明している点を高く評価している。

―参考―

書名：『アウシュヴィッツへの道―ホロコーストはなぜ、いつから、どこで、どのように』

著者：永岑三千輝

発行者：横浜市立大学学術研究会

制作・販売：春風社（TEL 045 - 261 - 3168）

価格：2500円＋税

以上